

伊丹ルーテル教会枝の主日礼拝

2021年3月28日

前奏：

招きのことば：詩編 118 編 17-25 節

死ぬことなく、生き長らえて 主の御業を語り伝えよう。
主はわたしを厳しく懲らしめられたが 死に渡すことはなさらなかった。
正義の城門を開け わたしは入って主に感謝しよう。
これは主の城門 主に従う人々はここに入る。
わたしはあなたに感謝をささげる あなたは答え、救いを与えてくださった。
家を建てる者の退けた石が 隅の親石となった。
これは主の御業 わたしたちの目には驚くべきこと。
今日こそ主の御業の日。今日を喜び祝い、喜び躍ろう。
どうか主よ、わたしたちに救いを。どうか主よ、わたしたちに栄えを。

罪の悔い改めと赦しのことば：

会衆：私たちは生まれつき、自分中心、わがままで、心の中に本当の愛のかけらもありません。
思いとことばと行いで、まことの神を軽んじて、となりびとにも愛のない、神の御前に
罪人です。神様、本当にごめんなさい。私たちは祈ります。私たちを救うため あなたが
お与えくださった イエス・キリストによって、どうかあわれんでください。アーメン。
(短い黙祷を持ちましょう)

牧師：何でもおできになる神様は、あなたのすべての罪を赦すために、そのひとり子、イエス・
キリストを十字架の上で死に渡してくださいました。ですから神様の御言葉をとりつぐ
務めに任じられた牧師として、今、あなたがたに宣言 します。父と、御子と、聖霊のお
名前によって、あなたの罪は赦されました。安心して行きなさい。 **アーメン。**

使徒信条

われは、天地のつくり主、父なる全能の神を信ず。

われは、そのひとり子、われらの主、イエス・キリストを信ず。

主は聖霊によりて宿り、おとめマリヤより生まれ、ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、
十字架につけられ、死して葬られ、
陰府(よみ)にくだり、三日目によみがえり、天に昇り、父なる全能の神の右に座したまえり。
生ける人と死にたる人とを審かんがため、かしこより再びきたりたまわん。

**我は聖霊を信ず、また、聖なるキリスト教会、すなわち聖徒の交わり、罪のゆるし、からだの
よみがえり、限りなきいのちを信ず。 アーメン。**

祈り

愛とあわれみに満ちておられる私たちの父なる神様、心から感謝をいたします。今朝もともに礼拝にあずかり、あなたのみ言葉をいただいて一週間を始めます。ここであなたの赦しをいただきます。新たにいのちをいただきます。ここから感謝をもって新しい一歩を踏み出します。あなたはみ言葉を聞く私たちをここから送り出してくださいますが、あなたはまた私たちの日々の生活の現場に来てくださって私たちを導き支えてくださいます。日常生活の中でこそあなたは私たちを導き、あらゆる災いから守り、隣人の力になるように鍛え用いてくださいます。新型コロナウイルス・ウィルスの感染が拡大しています。緊張感を保ちながら、その中でも御手にゆだね確信をもって、あなたの子どもとして安心して生き生きと生きる日々を与えてください。この祈りを、私たちの救い主であり主であるイエス・キリストのお名前によってお祈りいたします。 **アーメン。**

使徒書朗読：フィリピの信徒への手紙 2章 5-11節

互いにこのことを心がけなさい。それはキリスト・イエスにもみられるものです。キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になりました。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。このため、神はキリストを高く上げ、あらゆる名にまさる名をお与えになりました。こうして、天上のもの、地上のもの、地下のものすべて、イエスの御名にひざまずき、すべての舌が、「イエス・キリストは主である」と公に宣べて、父である神をたたえるのです。

福音書朗読：マルコによる福音書 11章 1-11節

一行がエルサレムに近づいて、オリーブ山のふもとにあるベトファゲとベタニアにさしかかったとき、イエスは二人の弟子を使いに出そうとして、言われた。「向こうの村へ行きなさい。村に入るとすぐ、まだだれも乗ったことのない子ろばのつないであるのが見つかる。それをほどいて、連れて来なさい。もし、だれかが、『なぜ、そんなことをするのか』と言ったら、『主がお入り用なのです。すぐここにお返しになります』と言いなさい。」二人は、出かけて行くと、表通りの戸口に子ろばのつないであるのを見つけたので、それをほどいた。すると、そこに居合わせたある人々が、「その子ろばをほどいてどうするのか」と言った。二人が、イエスの言われたとおり話すと、許してくれた。二人が子ろばを連れてイエスのところに戻って来て、その上に自分の服をかけると、イエスはそれにお乗りになった。多くの人が自分の服を道に敷き、また、ほかの人々は野原から葉の付いた枝を切って来て道に敷いた。そして、前を行く者も後に従う者も叫んだ。「ホサナ。主の名によって来られる方に、祝福があるように。我らの父ダビデの来るべき国に、祝福があるように。いと高きところにホサナ。」こうして、イエスはエルサレムに着いて、神殿の境内に入り、辺りの様子を見て回った後、もはや夕方になったので、十二人を連れてベタニアへ出て行かれた。

讚美歌 249 番

- 1 われ 罪びとの頭(かしら)なれども 主は我がために 生命(いのち)を捨てて、
尽きぬ命を 与えたまえり
- 2 あまつ御国の 民とならしめ、幹に連れなる 小枝の如く、ただ主によりて 活かしたまえり
- 3 たえにも尊き み慈しみや、求めず知らず 過ぎしうちに、主はまず我を 認めたまえり
- 4 思えばかかる 罪びと 我を 探し求めて 救いたまいし 主のみ恵みは 限りなきかな
アーメン

説教：「イエスの言われたとおりに話した」

私たちの父なる神様と御子イエス・キリストから、恵みと平安が豊かにありますように祈りつつ、御言葉をとりつぎます。

本日は受難週のはじめの主日、枝の主日です。イエス様はいよいよエルサレムに来てくださいました。人生最後の1週間をすごされるためです。木曜日には捕らえられ、金曜日には十字架ではりつけにされて殺されました。そして、その日を数えて三日目の朝、すなわち来週の日曜日の朝に復活される、という一週間です。

この一週間は大切な一週間です。マルコの福音書は16章までですが、11章から16章の6章分がイエス様の最後の1週間を記録しています。3分の1以上の分量が割かれています。そしてその一週間は、ろばの子にのってエルサレムに入城されたことから始まります。神様は今日の聖書の言葉によって、イエス様が何のためにお生まれくださったのか、イエス様が与えて下さる罪の赦しがどれほど大きな価値のあるものかを教えてくださいます。

ではマルコの福音書11章1節に記されている、イエス様のエルサレム入城のところをご一緒にたどってみたいのですが、いきなりその箇所を読んでも文脈がわからないといけませんので、その少し前を見てみましょう。前の章の中ほど、10章32節を見ますと、イエス様がエルサレムに上って行かれる途上の場面が出てきます。イエス様は弟子たちの先頭をあるき、「わたしはエルサレムで祭司長、律法学者に捕らえられて死刑を宣告され、異邦人に引き渡されて殺されるが三日目によみがえる」と予告しておられます。次いで10章35節にはそのことを聞いていた弟子たちの反応が書かれています。イエス様が「いよいよエルサレムに行かれるならついに王様になるのだろうから、そこで自分は偉い立場につかせてほしいと願いました。するとイエス様は、「わたしは人々から仕えられるために来たのではない。そのような王様になるためではない。仕えるために来た、多くの人のために身代金として自分のいのちをささげるために来た」と言われました。

さらに進んでエリコと言う街についたときのことです。10章46節からに記されていますが、道端にすわって物乞いをしていた盲人のバルティマイがナザレのイエス様がきたというのを聞いて、「ダビデの子よ！わたしをあわれんでください」と叫びました。その昔、イスラエルの民は

ダビデ王によって独立した立派な国を建てました。イエス様のことを王様と呼んだのです。イエス様によって目が見えるようにしていただき、バルティマイはイエス様の一行に従ってエルサレムまでついていっています。

そのようにして今日の箇所、11章に入ります。一行はエルサレムに近づきました。オリーブ山のふもとのベトファゲとベタニアにさしかかったとき、イエス様は、弟子たちを近くの村に遣わして、まだだれも乗ったことのないろばの子を連れてくるようにとお願いしました。誰かが何かをいったら「主がお入り用です」と言うように。主、とは、すべてをご支配くださる王様のような方です。ほんとうにそうになりました。イエス様が言われた通りに「主がお入り用です」とそのまま言うと許してくれました。

準備ができました。イエス様はエルサレムに入っていけます。エルサレムではちょうど過ぎ越しの祭りがおこなわれていました。イスラエルの民がモーセによってエジプトの奴隷から約束の地への旅に脱出したことを祝うお祭りです。ここでふたつの出来事がありました。ひとつは民衆です。喜んで、期待をもってイエス様を迎えました。そのあとイエス様は神殿の境内に入りました。そこでは歓迎もなく、救い主が来たのにだれも迎えませんでした。イエス様はお弟子たちとベタニアに帰りました。このようにしてイエス様の最後の一週間が始まったのです。

イエス様は何のためにお生まれくださったのでしょうか。それは10章45節にあるように、多くの人の身代金としてご自分のいのちをささげるためでした。罪の裁きを私たちに代わってその身にお受けになるため、そうして私たちの罪を赦して、罪と死と悪魔の支配から解放するためでした。そのためにエルサレムに來られました。

しかし人々は別の期待を持っていました。王様として迎えました。王様なら立派な軍馬にのってくるはずです。たくさんの兵隊を従えてくるはずです。イエス様は威厳のある馬にのらず、荷物を運ぶようなるろばの子にのっています。ろばは神殿で初子をささげさせてもらう価値さななかった動物です。兵隊はいません。でも預言者ゼカリヤの書9章9節で「いつか王がロバに乗ってエルサレムへやってくる」、と預言していました。来るべき王はへりくだったお方であり、高貴な騎馬ではなく庶民が物を運ぶために用いる動物であるろばの子に乗って、御自分の民のもとに来る、と預言されていたのです。それで民は、昔エフーという王様を迎えたときのように道に自分たちの服をしいて迎え、勇士マカベヤを迎えたように棕櫚の葉のついた枝をしいて迎えました。王様が来てくれた！と叫んで、ホサナ、ダビデの子が来てくれたと喜びました。ホサナ、というのは「今救ってください」という詩編の言葉です。民衆はイエス様を立派な王として、世の中を変えてくれる王として期待しています。

民の熱狂的な歓迎がありましたが、ローマの軍隊をやっつけてエルサレムを世界の都にして、ユダヤ人の王国を再建するためにこられたものではありません。弟子たちも、そしてエルサレムでイエス様を出迎えた人々も、まったくイエス様が來られた意味がわかっていなかったのです。

私たちも救いを求めます。しかし神様は救い主を、私たちの期待とは違う方としてお送りくださいます。イエス様は、私たちの期待とは違う救い主、私たちが期待もしないもっとすばらしい救い主として来てくださったのです。

私たちは、私たちの願いをかなえてくれる救い主を期待します。それは私たちが幸せになるためです。そこに私たちが造り上げる偶像があります。私たちを幸せにすることを願って、私たちは自分の思い通りにしてほしいとお願いする偶像をつくっていくのです。

しかし、イエス様はそのようなお方ではありません。私たちの幸せを実現するために、私たちの願いを聞いて邪魔になる人たちの命をうばうようなお方ではありません。私たちの幸せを実現するためにご自分のいのちを与えて下さる王です。私たちの自己中心な本当の姿を示し、そのような罪から私たちを解放するためのいのちです。私たちに本当に必要な罪の赦しを与えて下さる王です。ご自分が私たちのかわりになって、罪の裁きを受けてくださって、私たちに赦しを与えて下さる身代金となってくださった王です。

木曜日に民の指導者たちに抵抗することなく逮捕され、深夜の不当な裁判の席でも一言も弁明されず、金曜日の朝にはローマ軍に渡され、ローマ兵の鞭を受けました。どこにも私たちの期待する王の姿はないのです。惨めなイエスの姿を見て人々は失望して叫びました。ホサナと叫んだ同じ口で、イエスを十字架につける！と叫んだのです。イエスは金曜日に十字架につけられ、死んでいかれました。

私たちは、自分がごめんなさいということをごできるだけ先にのびします。相手がまず折れたら、そのあとでごめんなさいといおうか思います。ですから相手の頭をカブくで下げさせようと考えます。軍馬のように力と圧力で人を支配したい心でいっぱいです。そんな私のために、イエス様はまずご自分のいのちを与えてくださいました。神様の前でも私たちは神様を思い通りに動かしたいと思ううぬぼれたものですが、そのような私を赦すため、イエス様はまず私のために償いの裁きを受けてくださいました。

イエス様は、入城された後、神殿の境内に行っています。イスラエルの王の都、エルサレムの神殿です。神様の独り子であるイエス様が、まことの王として来られたのに、誰もイエス様を迎えようとしていません。神殿の祭司長たちはイエス様を迎えるどころか、十字架につけて殺すことを考えていました。そしてローマから総督として任じられていたポンテオ・ピラトは、このまちでイエス様を十字架刑にすることを許してしまいます。

このようなエルサレムの姿はまた、私たちの生まれながらの心を示しています。主イエス様を王として心に迎えるよりも、自分が王となって自分の思いで人を支配していきたいと願っています。人に認められる居場所を得て、自分の孤独をいやしてくれる人々に囲まれて、自分の夢を実現していくことを基本に考えます。自分が認められ、いやされ、夢をかなえることをまず

基本的に求めます。イエス様が神殿の境内に行ったのに、そこでだれも迎えることがなかったのは、そのような私たちの姿を見ているようです。

しかし、イエス様はそのように私たちが自分の姿をみることができるようになってくださいますが、私たちを責めるためではありません。むしろそのことはご存知です。私たちがそのような思いのとりこになって、自分で自分を変えることができず、神様にただしく心に向けることができない罪びとであることをご存じなのです。人を力づくで支配し、自分の幸せを最優先して願う、どうしようもない私たちの本性をご存じです。そして、私自身が、そんな私が赦されたり、新しい心で謙遜で素直に生きていくことはできるわけがない、とあって、あきらめきっている私たちの心をご存じです。

イエス様は私たちに覆いかぶさって、私たちを裁き、支配し、私たちを骨抜きにして神様の奴隷にするために、軍馬にのって来られる方ではありません。むしろ、イエス様は荷物を運ぶような価値のない子ろばにのってくることを選ばれました。私たちが自分で自分の心を入れ替えてイエス様に仕えるようになることを求めておられません。イエス様はどうにもならない私たちのためにいのちをささげるために来てくださった救い主です。

私たちは、頑固な自己中心な心を、何とか努力してあらためることが少しでも出来たなら、神様が私をあわれんでくださると思いがちではないでしょうか。神様の赦しを受けるためには、まず私がよい人にならなければならないと考えてしまいます。そうではありません。だから神様の赦しを受けることが難しいのです。私たちはどうしても順番を反対に考えてしまいます。赦されるために良い人にならなければならないのではありません。赦されて、そしてよい人に変えていただくのです。償いをしたら神様に受け入れられるのではありません。あなたの代わりに償いとしてくださったイエス様のゆえに神様に受け入れられていることをあなたが受け入れるのです。神様は私の罪を赦すために、イエス様を与えてくださいました。イエス様を信じて、罪赦されます。赦されたものは新しい心を神様に作っていただいて、人々に正しく償いをし、すすんで頭をさげて謝ります。人々を愛して人々に役立つことが生きがいとなるよう変えていただくのです。

今週は、王であり主であるイエス様がわたしのために苦しんでくださった一週間です。自分のわがままなかたくなな頑固な心を、イエス様にご存じで、その償いをしてくださいました。十字架でご自分のいのちを与えて下さったイエス様を自分のためと信じて、洗礼によってこのイエス様のみ救いにあずかっていることを豊かに確信して、悔い改めと信頼をもって一週間をすごしてまいりましょう。

「愛する天のお父様、あなたの愛する独り子のイエス様により今日の日も、私をまもってくださって本当に感謝をいたします。わたしの犯した罪のため、主イエス様が十字架でかわりに死んでくださった恵みの約束信じます。赦されたことで安心し、あなたの恵みを喜びます。わた

しのからだも魂もそっくりあなたにまかせます。あなたの聖なるみ使いに悪いものの力からわたしをまもらせてください。主イエスの名前で祈ります。アーメン」

人知をはるかに超えた神様の平安が、あなたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってください。アーメン。

讚美歌 286 番 献金 献金感謝の祈り

- 1 神はわがちから わが高きやぐら 苦しめるときの 近き助けなり
- 2 **たとい地はかわり 山はうなばらの 中に移るとも われいかで恐れん**
- 3 神の都には 静かに流るる きよき河ありて み民をうるおす
- 4 **御言葉の水は 疲れをいやして 新たなる命 あたえてつきせじ**
- 5 神のみもとべは 常にやすらげく 苦しみ悩みも 消えてあとぞなき **アーメン**

主の祈り

天にましますわれらの父よ、願わくはみ名をあげさせたまえ。みくにを来たらせたまえ。みこころの天になるごとく地にもならせたまえ。われらの日用の糧を今日も与えたまえ。われらに罪をおかす者をわれらが赦すごとく、われらの罪をもゆるしたまえ。われらを試みにあわせず、悪より救い出したまえ。国と力と栄えとは、限りなくなんじのものなればなり。アーメン。

頌栄：讚美歌 543 番

主イエスの恵みよ 父の愛よ 御霊の力よ ああみ栄よ **アーメン**

祝福の言葉

仰ぎこいねがわくは、私たちの主、イエス・キリストの恵み、父なる神の愛、聖霊の親しきお交わりが、御前に集う一同とともに、今日も、この一週間も、いく久しくとこしえまでも、豊かにありますように。**アーメン**

後奏